

自己治療としてのホラー愛好 —— 自閉スペクトラム症者と文学作品を読む ——

横 道 誠

0. はじめに

本論文の目的は、自閉スペクトラム症者による小説読解のあり方をインタビューによって調査することにある。自閉スペクトラム症者は共感性がない、他者を理解する障害を有するなど論じられてきたが、最近では異論が提出されるようになった。筆者は自閉スペクトラム症を診断されており、この精神疾患の当事者同士で小説作品について意見交換を交わす研究を続けてきた。過去に3人の女性当事者を対象として研究し、すでに公表された成果として、横道 2021 と横道 2024 がある。今回は初めて男性当事者（30代）を研究対象とする。

構成としては、初めにインタビューーの生活史を示し（1.）、インタビューーによる作品の読解内容を筆者自身の見解を織りまぜながら記していく。インタビューは3回にわたり、1回目は江戸川乱歩の『パノラマ島綺譚』（『パノラマ島奇談』などの別表記もある）と『孤島の鬼』を（2.）、2回目は夢野久作の『ドグラ・マグラ』を（3.）、3回目はエドガー・アラン・ポーの『アッシャー家の崩壊』を扱った（4.）。最後に総合的な考察を記す（5.）。

1. 生活史

以下に研究協力者（当事者）のヨシさんに関する生活史を記す。まず筆者が当事者にインタビューをおこない、ついで筆者がその内容を当事者のひとり語りの形式に成形して、さらに当事者に加筆修正を加えてもらって成立した。したがって、この文章を専門家（筆者）と当事者の共同創造（コ・プロダクション）と呼ぶこともできる。

*

僕は30代後半、四国出身で、この7年くらいは関西に住んでいます。自閉スペクトラム症と診断されているほか、家族仲が悪く、実家とは絶縁状態。いわゆるアダルトチルドレンということになります。

小さい頃の記憶はあまり残っていません。絵本は好きでしたが、絵だけ見ていたようなところがありました。「ムーミン」シリーズの原作を読んでも、やっぱり挿絵だけを楽しんでいた感じです。あと図鑑をたくさん読む、というより眺めてました。

小学生になって、国語の授業で扱われている小説がおもしろいと思いました。日本の短歌、俳句、詩なども。放課後の時間は図書室にこもっていました。図書室では新美南吉とか小川未明の児童文学は拾い読みしていて、子ども向きに作った落語の本とかマンガで読む歴史を楽しんでました。宮沢賢治が好きで、『銀河鉄道の夜』から入って、『春と修羅』なども読みました。ただし『注文の多い料理店』とかの童話はともかく、詩に書かれている内容は、あんまりわからなかったです。意味もわからないまま、辞書で言葉の意味を調べていました。あとはSF。星新一、筒井康隆。3大SF作家のうち、小松左京はあまり読んでいません。

その頃『週刊少年ジャンプ』が全盛期で、『ドラゴンボール』、『スラムダンク』、『幽☆遊☆白書』なんかが大人気。でも僕は少年マンガ的な展開が好きじゃありません。主人公がキラキラしていて、感情移入できない。善悪がはっきりしていて、悪が倒されて当たり前という世界観が納得できなくて。悪には悪なりの立場があると思っていました。それで好きになったのが手塚治虫の『ブラックジャック』。闇が深く、受け入れられました。アセクシャルなので恋愛に興味も湧かなくて、高橋留美子は読んだけど、恋愛部分はスルーしながらギャグを楽しんでましたね。

オカルトやミステリーが好きになって、『世にも奇妙な物語』は欠かさず観てました。昼にやってた『怪奇特集!! あなたの知らない世界』とかの心霊系の特番も好きでした。マンガ雑誌なら、そういう系のマンガを取録した『ネムキ』。でも男が少女マンガを読むことは良くないという風潮はありましたから、隠れてこそこそ読んでました。「花の24年組」の作品や『ホラーM』なんかも好きでした。作家では御茶漬海苔、犬木加奈子、日野日出志らが好みでした。女性向けのホラーマンガはねっとりしていて、趣味に合いました。

小学6年生のときに『エヴァンゲリオン』をやっていて、難しい用語がたくさん出てくるんだけど、めちゃくちゃハマりました。劇場版の『Air / まごころを、君に』、残酷だとか気持ち悪いとか言われるけど、いまでもトップクラスに気に入っている映画です。家族が壊れていたので、家族同士関係が希薄。それで共感できたと思うのですが、時代にもフィットしてました。1995年前後の絶望感って半端じゃなかった。オウム事件とか、阪神の大震災とか。でもワクワク感もありましたよ。世界が終わって欲しいと思いながら、現実に向きあっていたというか。バッドエンドが好きだから、『エヴァ』の元ネタになった永井豪の原作版『デビルマン』も好きですね。

中学生になると芥川龍之介を読みだして、『地獄変』、『歯車』、『羅生門』、『藪の中』など。独特の不安感が良かったです。村上春樹で最初に読んだのは『ダンス・ダンス・ダンス』。途中で人が理不尽な死に方をしている、そういうところも気持ちにフィットしました。江戸川乱歩も読んで、『芋虫』がいちばん好きです。猟奇系の作品。夢野久作を知って、『ドグラ・マグラ』を読みはじめたけど、難しいし重たかった。ポーの『黒猫』『早すぎた埋葬』も覚えてます。生きたまま埋葬される怖さ。

それからアガサ・クリスティ。『ABC殺人事件』『オリエント急行殺人事件』など。クリスティが得意としていた叙述トリックの技法なんかハマるわけで、テレビドラマの『古畑任三郎』を観るようになって。犯人が最初からわかっている倒叙ものですが、三谷幸喜の脚本が魅力的で、『古

畑』のモデルになった『刑事コロombo』も観ていきました。

未診断だけが発達性協調運動症があるので、ゲームは苦手なのですが、サウンドノベルはボタンを押せば誰でもできるから、『かまいたちの夜』をやってみました。我孫子武丸のシナリオが抜群でした。ほとんど読書と一緒にだけど、音がついていて臨場感がすごい。我孫子武丸は大学生になって『殺戮にいたる病』に感心しました。

マンガでは中学生の頃『ねじ式』を読んで、世界が一気に広がった感じです。きっかけはゆうきまさみの『究極超人あ〜る』でパロディに使われていたことかな。それからつげ義春の作品をいろいろ読むようになって、『ゲンセンカン主人』とかですね。つげさんの作品は何度読んでも新しい発見があります。高校になったら、その延長で「ガロ系」の作品、ねこちるとかも読むようになりました。

それから高校時代には映画をよく観るようになって、とくにどハマりしたのはキューブリック。『2001年宇宙の旅』、『シャイニング』、『時計じかけのオレンジ』。どれもよくわからないけど、とにかく気味が悪い。その釈然としない感じが、かえって気持ち良いって感じるんです。ほかにもたくさん観たけど、いま思いだせるのは少ないです。『ユージュアル・サスペクツ』とか『ファイト・クラブ』とか。

歴史上の人物では、南方熊楠とか石原莞爾とかに惹かれるようになりました。狂人か天才かと思議な印象を与えた人たち。もっと前には、メジャー路線の織田信長とか諸葛亮孔明に興味があったんですけどね。みんながかっこいいと思っているとわかると、興味がなくなっていきました。自閉スペクトラム症の特性に関係があるかもしれませんね。

文学をわかるようにならないと恥ずかしい、というような気持ちもあって、高校生になると中島敦の『山月記』をきっかけに、いろいろな古典を読むようになりました。夏目漱石、森鷗外、幸田露伴、鷗外は安楽死を扱った『高瀬舟』に考えさせられました。白樺派はヒューマニズムが鼻について、武者小路実篤も志賀直哉も好きじゃありませんでしたけど、例外的に有島武郎だけは地に足ついていて、好きでした。それから菊池寛を読んで、『恩讐の彼方に』とか『父帰る』とか。堀辰雄の『風立ちぬ』。山本有三の『路傍の石』。社会問題をテーマにした作品が多かった気がします。ミステリ要素も強い社会派推理小説が好きで、松本清張の『砂の器』や宮部みゆきの『火車』などが好きでした。刺さるかどうかは、文体次第です。文章の書き方にもいろいろあるんだなとわかってきました。

海外文学ではサン＝テグジュペリの『人間の大地』とか、ヘミングウェイの『老人と海』とか、あとカミュの『異邦人』と『シーシュポスの神話』、モーパッサンの『脂肪の塊』などを読みました。でもじぶんの本質にはあまり関係がないので、そんなに深入りしませんでした。

その頃は新しいタイプのミステリーが社会現象になっていて。「メフィスト賞」周辺の森博嗣、清涼院流水、西尾維新など。叙述トリックものだと殊能将之の『ハサミ男』を読みました。ジャンルを問わずトリッキーな作品に惹かれます。あの頃話題になっていたミステリーは僕の趣味に合うものが多かった。

マンガだと『アフタヌーン』周辺が好きになりました。とくに『寄生獣』は、棺桶に入れてほしいくらいの作品です。世界観にぶれない芯があって、限られた登場人物でうまく魅せていく。ああいうふうには余白が大きく使われていて、寂寥感があって、セリフが限定的という作品は好みのタイプです。ほかには鬼頭莫宏。『ぼくらの』とか『なるたる』とか。植芝理一の『ディスコミュニケーション』、黒田硫黄の『大日本天狗党絵詞』、遠藤浩輝『EDEN』も好きです。『なるたる』は人類滅亡エンドだから、『エヴァ』とか『デビルマン』と一緒にですね。あのあたりのマンガは、いまでも僕にとって大きい存在です。

サブカルやアンダーグラウンドが好き、アンチメジャーな趣味なんで、人気が出るまでは好きなんだけど、人気が出始めると冷めてしまいます。性格悪くなって思うんですけどね。最近だと『ダンジョン飯』。連載が始まった頃から好きだったけど、誰もが「良い」と言いはじめたら、冷めてしまった。大ヒットしはじめた映画なんかも、観に行くのに腰が重くなってしまいます。

なんであれ、深掘りする人って少ないじゃないですか。たとえば宮崎駿の『風の谷のナウシカ』が好きなのはたくさんいるけど、なかなか原作の『ナウシカ』まで行かない。そこから諸星大二郎に行ったりしない。メジャーからマイナーへとラインを超えていかないのを、残念に感じます。

大学に通っていた頃は、海外文学を少し多く読みましたかね。翻訳の文体がフィルターになってしまって、外国文学を避けてきたんです。でも少し慣れたので、オーウェルの『動物農場』とか『1984年』を読んで、好みでした。『十五少年漂流記』のダーク・ヴァージョンみたいな『蠅の王』も良かった。あと『不思議の国のアリス』をおとなになってから読むと、より深く楽しみました。またエドワード・ゴーリーにハマったのもこの頃。

なかでもカフカはどハマりしました。『断食芸人』が好きですね。カフカは未完の作品があるので残念だと思っています。救いのないのが、大好きですね。ドイツ語であれが読めたらカッコいいですけど、語学は不得意です。日本語に似ている韓国語は、現地に住んだこともあるから、だいぶわかるようになったんですけど。

社会人になったら、ワーカホリックで、起きてるときはずっと働いていました。塾の講師として教えて、疲れるから小説を読む気力が湧かなくなって、おじさん向けのマンガなんかを読むようになっていきましたね。『モーニング』に載っているような作品。山田芳裕とかです。それでも社会に対する意識は強くて、政治家の不正なんかについていつも憤りを感じるから、社会批判的な内容の作品をたくさん読んでる気がします。池上遼一の『サンクチュアリ』や、かわぐちかいじの『沈黙の艦隊』など。

現在、小説はほとんど読んでいません。前に読んだのはなんだったかな。もうわからないくらい。社会人になって鬱を患ってから、関心や記憶力がさがりました。マンガだったらヴィジュアルがあるから読めるんですけど。でも、年齢があがってきたからか、最近のアニメは効果処理がゴテゴテなので、観づらく感じるようになっていきます。じぶんが好きな昔のセルアニメとは異なっています。宮崎駿の『君たちはどう生きるか』には激ハマりしたんですけど、でも『ラピュタ』の頃みたいに一枚一枚書いているわけじゃないから、それは残念ですね。そんなわけでアニメは観

なくなってきました。

映画も観る機会は減ってるけど、発達仲間〔筆者注：発達障害の問題を介して自助グループやSNSで知りあった友人・知人〕から映画鑑賞の集まりに誘ってもらえました。クリストファー・ノーランはとても好きですよ。最初に観たのは『メメント』だったかな。『オッペンハイマー』も素晴らしかった。デヴィッド・リンチにちょっと似てるところがありますよね。リンチは『マルホランド・ドライブ』を熱愛しています。女性ふたりの物語なので、趣味じゃなさそうって想像していたけど、怪奇趣味たっぷりです。ストライクでした。

基本的に、気に入った作品は何回も読みかえすタイプです。自閉スペクトラム症の特性に関係があるかなと思ったりしています。最近では、マンガですが、『寄生獣』や手塚治虫の『火の鳥』やまた読みなおしてました。

文学については、文体を味わったりはできるけど、専門家みたいに具体的に論じられるほどじゃない。そんなあたりの読書家ということになります。

*

補足すると筆者とヨシさんは、筆者が主宰する発達障害者向けの自助グループで知りあった。筆者とヨシさんはともに自閉スペクトラム症を診断されており、また機能不全家族で育ったアダルトチルドレンでもある。このような当事者がしばしばそうであるように、筆者にもヨシさんにもPTSD（心的外傷後ストレス症）の症状が出ており、また多くのPTSDの患者がそうであるように、依存症（アルコール依存）の様相も顕著に見られる。筆者とヨシさんは性別を等しくし、年齢が近い（筆者が6歳上）というだけではなく、当事者としての性質がきわめて似ているという点に今回の調査の特徴がある。

2. 江戸川乱歩の『パノラマ島綺譚』と『孤島の鬼』

2.1. 『パノラマ島綺譚』の梗概

売れない作家の人見廣介は、新聞記者からじぶんに瓜二つだという富豪の菰田源三郎が亡くなったことを聞き、海中自殺を装って姿を消す。廣介は菰田家の墓から源三郎の遺体を暴いて、その衣装を身にまとい、道端で倒れたフリをする。廣介は使用人や源三郎の妻の千代子を騙して、富豪の立場を手に入れ、かねてからの野望を実行に移す。それは無人島にさまざまな都市や自然風景を再現したパノラマを設立し、理想郷として享楽に耽ることだった。千代子は夫の正体を疑うようになっていたために、廣介はパノラマ島に移住し、千代子を殺して円柱用のセメントに流しこむ。廣介は裸の美女たちや仮装した人々とカーニバルを開いて、とめどなく悦楽を楽しむ。しかし以前から廣介の理想を知っていた文学者・北見小五郎が、すべてのからくりを見抜く。入れ替わりと殺人が露見し、パノラマ島の建設で膨大な資産を使い果たしてしまった廣介は、巨大

な黒い筒に飛びこんで、花火とともに打ちあげられる。廣介の五体は四散し、血しぶきがパノラマ島に降りそそいでくる。

2.2. 『パノラマ島綺譚』に関するインタビュー

ヨシさんは、明智小五郎が登場する映像作品を小学生の頃から観ていて、それが乱歩作品への入り口になったと語る。作品をあれこれと読んでみたのは中学生の頃だったと記憶しているが、先行して丸尾末広によるマンガ版『パノラマ島綺譚』を先に読んだかもしれないと語る。

本作では曲馬団、見世物小屋、テーマパークなどに通じる世界観が描かれており、乱歩なりの快楽のあり方がそういうものなのかなと感じたという。パノラマ島の描写をしたくて物語をこしらえたのだろう、とも推測する。そこで筆者はヨシさんに対して、乱歩自身による後年の回顧談に注意を促した。

連載中は余り好評ではなかった。初めの方の人間入れかわりの箇所は面白いにしても、この小説の大部分を占めるパノラマ島の描写が退屈がられたようである。ポーの「アルンハイムの領地」や「ランダーの屋敷」が私の念頭にあったのだが、出来上がったのは、意あって力足らぬ平凡な風景描写でしかなかった。しかし、発表後、年がたつにつれて、チラホラ好評を聞くようになった。中にも萩原朔太郎さんが、私の家の土蔵で酒を酌み交しながら、この小説をほめてくれたことを忘れない。それ以来、この作品に少しばかり対外的自信を持つようになった。(江戸川 1962: 9)

ヨシさんは、自身が資産家になることができても、ユートピアを作りたいという欲求は湧かないと思うと語る。アセクシャルで他者に対して性欲を感じないので、群れなす裸の美女たちに憧れることもない。願望がないと言えば変身や入れ替わりに関してもそうで、ヨシさんは本作を讀みながら「絶対にバレるでしょう」としか思わなかった。

筆者はいわゆるリビドー、いわゆる快感を追求する衝動的なエネルギーが欠けているということでしょうか、と尋ねた。するとヨシさんはそうだと思う、食欲なども少ない、承認欲求も弱い、褒められたら多少はうれしいけど、それ以上ではない、生きるために資産運用をしているが、大金持ちになりたいという願望も強いわけではない、しかし知識欲は旺盛であると答えてくれた。その知識欲はアンダーグラウンドな文化に向かう。たとえばヨシさんの部屋には風俗嬢やAV女優、変態性欲などに関する本がある。しかし、アダルトビデオを観たいという欲求は湧かない。

そんなヨシさんは、かつてたくさんの蔵書を所有していたが、引越しを繰り返した結果として、大量の本を新しい場所に移しつづけることにうんざりして、ミニマリストの方向に向かった。筆者も引越しのたびに持ち物をすべて処分したくなることもあるので、気持ちはよくわかる。

ヨシさんは、パノラマ島の魅力はわからないが、乱歩の極彩色を感じさせる世界観は好みだという。パノラマ島はヒエロニムス・ボスの絵画『快楽の園』(図1)を連想させるところがあり、

その絵は好みだという。絵の具を手に入れるにもたいへんな時代に、あれだけのものをよく描いたなと感じるそうだ。「祭壇画なのに、宗教というよりSF 的かつ奇妙奇天烈な印象」。



図1 ヒエロニムス・ボス「快楽の園」

そのような異端的な奇想に惹かれるので、『パノラマ島綺譚』でもっとも惹かれるのは最後の部分、「人間花火」の場面だと話す。引用しておこう。

夜の花火でもなく、そうかといって昼の花火とも違い、黒雲と銀鼠色の背景に、五色の光が怪しき艶消しとなって、それが、刻一刻面積を広めながら、ジリジリと釣天井の様に下って来る有様は、真実魂も消えるばかりの眺めでした。

その時、北見小五郎は、めくらめく様な五色の光の下で、ふと数人の裸女の顔に、或は肩に、紅色の飛沫を見たのです。最初は湯気のしずくに花火の色が映ったのかと、そのまま見すごしていたのですが、やがて、紅の飛沫は益々はげしく降りそそぎ、彼自身の額や頬にも、異様の暖かなしたたりを感じて、それを手にうつして見れば、まがう方なき紅のしずく、人の血潮に相違ないのです。そして、彼の目の前の湯の表に、フワフワと漂うものを、よく見れば、それは無慙に引き裂かれた人間の手首が、いつのまにかそこへ降っていたのです。(江戸川 2009a: 141-142)

石井輝男の映画『恐怖奇形人間』が同様に人間花火の場面で終わるのにも興奮した、とヨシさんは語る。しかしこの映画については、のちに改めて取りあげよう。

2.3. 『孤島の鬼』の梗概

30歳になる前に髪がすべて白髪となった箕浦金之助は、妻の緑と体験した出来事を語る。かつて箕浦は初代という女性と結婚を前提として交際していたが、そこに恋敵として諸戸道雄が割りこんでくる。諸戸は男色家で、箕浦に執着してそのようなことをしたのだった。初代が殺され、

調査を依頼した友人の探偵も殺され、箕浦は犯人は諸戸ではないかと疑う。探偵の遺品には、離島に監禁されている人為的なシャム双生児の秀ちゃんが、片割れの吉ちゃんに虐げられる苦悩を綴った日記が混じっていた。箕浦と諸戸は島に渡り、この地で諸戸の父・丈五郎が非道な人体実験によって多くの「片輪者」を作りだしていること、秀ちゃんもそのひとりだということを知る。丈五郎は片輪者による世界支配をもくろんでいた。初代の殺害も丈五郎が手配したことだった。性欲に駆られた諸戸が箕浦に襲いかかろうとする場面や、諸戸は誘拐されてきた子どもだということや、秀ちゃんの正体が初代の妹の緑だということが明らかになるなどの展開が描かれ、島に警察が上陸して事件が解決する。秀ちゃんと箕浦は結婚するが、箕浦は諸戸ともども醜く老けこんでしまう。諸戸は病死するが、最後まで恋しい箕浦の名を呼んでいたようだ。

2.4. 『孤島の鬼』に関するインタビュー

ヨシさんは『孤島の鬼』では、全体を人間ドラマが貫いていて、その点で『パノラマ島綺譚』よりもおもしろいと語る。前半では推理小説のようであるが、後半では冒険活劇が全面にせりだして来ていて、ほかの乱歩の作品と比べても物語性が高いと感じる。しばしば乱歩の最高傑作として語られるのも納得だ、と話す。

さらにヨシさんは、乱歩の作品では捻れた愛憎関係が描かれていることが多く、本作でも同様が、諸戸が不憫でもあり、おもしろくもあると話す。しかしヨシさんには異性愛の感情と同様、同性愛の感情もわからない。箕浦は諸戸の好意が満更でもない様子が描かれていたのに、最終的には明確に拒絶し、女性と結婚し、他方で諸戸は箕浦を恋しがりながら死んでいく。この展開のコントラストはあざやかだと感じつつ、拒絶された諸戸は献身的だただけに気の毒だなと感じたという。

日本の推理小説の黎明期を支えた本作だが、それだけにトリックの古さも目立つ。ヨシさんは中学生のときにも、殺人の方法が不自然、密室殺人に対する警察の捜査が甘いなどと思いながら読んだそうだ。他方で、「少年探偵団」シリーズを描いていた乱歩にふさわしく、冒険活劇的な部分に関しては、現在でも魅力的だと感じた。

『パノラマ島綺譚』で「人間花火」を好んだヨシさんらしく、『孤島の鬼』でもっとも好きなモチーフは「癒合双体」（人造のシャム双生児）だ。ヨシさんはもちろん奇形になりたいとは思わない、子どもを作る予定はないものの、子どもを持ったとして、その子が奇形の子だったら悲しいと感じるだろうと話す。しかし、それでもそういうものに惹かれるのをやめられない。手塚治虫の『ブラックジャック』にシャム双生児の体を外科手術で分離させる「2人のジャン」という回があって、小学生のときにその話を読んで、「この世には、ほんとうにこんな人がいるんだ」と驚いたという。ヨシさんが『孤島の鬼』でもっとも気に入っている一節は以下の部分だ。

さて最後に、登場人物の其後を、ごく簡単に書き添えて、この物語を終ることにしよう。

先ず第一に記すべきは、私の恋人秀ちゃんのことである。彼女は初代の実妹の縁に相違なく、樋口家の唯一の正統であることが分かったので、地底の財宝は悉く彼女の所有に帰した。

時価に見積って、百万円に近い財産である。

秀ちゃんは百万長者だ。しかも、現在ではもう醜い癒合双体ではない。野蛮人の吉ちゃんは、諸戸のメスで切離されてしまった。元々本当の癒合双体ではなかったのだから、無論兩人とも何の故障もない一人前の男女である。秀ちゃんの傷口が癒えて、ちゃんと髪を結び、お化粧をし、美しい縮緬の着物を着た彼女が、私の前に現われた時、そして、私に東京弁で話しかけた時、私の喜びがどれ程であったか、ここに管々しく述べるまでもなからう。

云うまでもなく、私と秀ちゃんとは結婚した。百万円は、今では、私と秀ちゃんの共有財産である。

(江戸川 2009b: 329)

ヨシさんは「分離されたシャム双生児の片方と結婚してしまうのか！」と乱歩の奇想ぶりに驚いたと話す。たしかに「云うまでもなく」という乱歩の断りおきは、「ほんとうに言うまでもないくらい自明か？」と読者を混乱させる。

ヨシさんは、『孤島の鬼』という作品名の「鬼」とは誰なのか、ということが問題になると思います、と指摘する。人工的に「片端者」を作りだしていた丈五郎か、箕浦を犯そうと襲ってきた諸戸か、それとも若くして白髪となった箕浦か。ヨシさんは言う。「謎が残されて、いろんな解釈が出てきて、議論が続く作品が、歴史に残っていくんだろうなと思います。アニメとかでもそうですね。宮崎駿の作品にしても、庵野秀明の作品にしても、解釈しても割りきれない部分があって、それでいつまでも人を惹きつける。『孤島の鬼』もそうだと思います。そういうのが、「文学的要素」ということかもしれないですね」。

2.5. 石井輝男監督『恐怖奇形人間』について

ヨシさんは、乱歩の作品に付けられた装画では、竹中英太郎のものが好きだと語る(図2、図3)。視覚に関する話題となったので、乱歩の作品を映像的なイメージとともに読んでいるか、乱歩の文体は視覚を喚起するものと感じるかを尋ねてみた。ヨシさんの回答は、絵画的なイメージの文体だとは感じない、意外と淡白に記述されることが多いので情報として咀嚼しやすい、そしてインパクトのある言葉遣いがあると、それに魅了されるというものだった。



図2 竹中英太郎の挿絵



図3 同

(『孤島の鬼』、創元推理文庫、1987年より)

筆者はさらに、映画『江戸川乱歩全集 恐怖奇形人間』に話題を広げた。今回のインタビューでは、『パノラマ島綺譚』『孤島の鬼』だけでなく、両作を掛けあわせたような印象の同映画についても語りあいたいと事前に伝えていた。この映画の実態について、佐藤重臣はつぎのように説明している。

「恐怖奇形人間」は、乱歩の「闇に蠢く」「孤島の鬼」「人間椅子」「パノラマ島奇談」「虫」それに横溝正史の「八ツ墓村」からなりたっている。骨子になっているのは「パノラマ島奇談」で、自分に瓜ふたつの男に代って、棺桶からはい出て資産家の後目になり代るところ。島にパノラマ博物館を作るところ。あと裸女の肩車や人間花火が、そのまま使われている。「孤島の鬼」からは奇形製造とシャム双生児、サーカス、沖ノ小島などのイメージが借りられ「闇に蠢く」からは人肉嗜好、「虫」からは屍体腐爛、「八ツ墓村」からは、旧家のイメージが、とり入れられている。（佐藤 1995: 77-78）

『恐怖奇形人間』は長年「封印作品」として知られてきた映画で、筆者は21世紀初頭にアメリカで発売されたDVDを購入したが、日本国内で映像ソフト化されたのは、それから20年ほど遅れてだった。2024年現在は、動画配信サービスなどでも鑑賞できるようになっていて、隔世の感を覚える。ヨシさんはつげ義春作品の愛好から出発して、石井監督の『ゲンセンカン主人』を鑑賞し、それをきっかけとしてこの映画を知ったと語る。

ヨシさんは、精神病院から始まる創作物を本作と夢野久作の『ドグラ・マグラ』しか知らないと言語。なるほど、先の引用で佐藤は、乱歩の諸作品だけではなく横溝正史の『八ツ墓村』も『恐怖奇形人間』に影を落としていると主張していたが、もしかしたら『ドグラ・マグラ』も追加して良い可能性がある。ヨシさんは語る。「その精神病院もしっちゃかめっちゃかですし。悪夢を見ている感じがおもしろいです」。

ヨシさんは、CGも高度な編集技術もない時代のチープな味わいの作品だが、それだけにたまに魅力的だ、乱歩のふたつの原作同様に、島に行くと異世界が広がっているという想像力が興味深い、暗黒舞踏を披露する土方巽は演技もうまいと思った、『刑事コロンボ』で主役の声を担当した小池朝雄が執事役として出ていて、聴きいってしまった、などと語っていく。

筆者は、『恐怖奇形人間』という作品名は東映企画製作本部長だった岡野茂が考えたものらしいということを話題にした上で、乱歩や石井の差別意識の有無について意見を尋ねてみた。ヨシさんは、差別意識はなく、アングラ的なものへの好奇心だと思う、中沢啓治のマンガ『はだしのゲン』などにも「キチガイ」といった差別用語が出てくるが、そのような表現を画一的に規制することには賛成できない、『恐怖奇形人間』では「裏日本」という言葉が使われ、差別的なニュアンスで使われているが、それは実際にあったこととして重要だと思う、と話した。

『恐怖奇形人間』の結末は『パノラマ島綺譚』に依拠した「人間花火」だが、『孤島の鬼』の要素が融合しているため、恋人たちふたりが打ちあげられ、五体がバラバラに飛びながら、生首が「お

母さーん！」と叫ぶという異様なもので、映画館でカルト映画としてリバイバル上映される際には、爆笑の渦が巻き起こったようだ。

この話をすると、ヨシさんはアニメの『チャージマン研!』を連想すると言うので、このアニメを熱愛し、DVD-BOXを所有している筆者は、第35話「頭の中にダイナマイト」のことではないかと応じると、「そのとおり、ただしシチュエーションを踏まえると第23話「恐怖! 精神病院」も近いかもしれません」との返事だった。

「頭の中にダイナマイト」の回では、西ドイツから来日したボルガ博士がジュラル星人によって誘拐され、殺害された上で頭に爆弾を仕掛けられる。博士を救出したチャージマン研は、その事実気づくと、「お許しください、ボルガ博士!」と言いながら飛行機から追っ手の円盤に向かって博士を投下し、博士の頭の時限爆弾は大爆発を起こす。その後、研は夕焼けを眺めながらせつなそうに「かわいそうなボルガ博士……」と追悼する。

「恐怖! 精神病院」の回では、精神病院に潜入している研が、病院職員の同席する家族との面会では狂気を装いつつ、父親に地下の秘密工場の存在を伝える。地下に潜入した研は、ヨーロッパの半分を破壊できるミサイル発射基地を発見。世界征服を企む院長とジュラル星人の計画を阻止するため、チャージマンに変身して戦う。研は基地を攻撃し、ジュラル星人を倒す。計画が失敗した院長は自殺する。任務を終えた研たちは車で帰途につき、研はバリカンに狂気を装って冗談を言う。

今回のインタビューで扱った3作品を愛好する筆者は、そもそもこのような異端的な、あるいは「奇形的な」作品を筆者が好むのは、小さな頃からじぶんが自閉スペクトラム症者と気づかぬままに己を「ふつうじゃない」と感じていたからかもしれない、という考えを話した。するとヨシさんは、「もちろん、ほくの場合もそういうことです」と応じ、「アンダーグラウンドな趣味に耽っていると、ほっとします」「鬱屈を解消できる時があった」などと応じてくれた。

3. 夢野久作の『ドグラ・マグラ』

3.1. 『ドグラ・マグラ』の梗概

「……………ブウウ————ンン————ンン……………」というボンボン時計の音で「私」は目覚めるが、じぶんが誰なのか、どこにいるのか、記憶が欠落している。隣室から「お兄さま」と呼びかける少女の声が聞こえ、じぶんは彼女の婚約者で、彼女を殺そうとしたことを教えられる。「私」の前に、九州帝国大学法医学教授・若林鏡太郎が現れ、ここが精神病棟だということ、ある富裕な家で起こった殺しあいと発狂しあいの怪事件に「私」が関わっていること、そのために、一ヶ月前に亡くなった正木敬之博は精神医学実験をつうじて「私」の記憶を回復させようとしていたのだ、ということ話す。

若林博士は「私」に記憶を回復させようとして、正木博士の教授室に案内する。そこで「私」は『ドグラ・マグラ』という作品や、正木博士の遺した「キチガイ地獄外道祭文」「地球表面は狂人の

一大解放治療場」「絶対探偵小説 脳髓は物を考える処に非ず」「胎児の夢」「空前絶後の遺言書」「心理遺伝論附録」という奇妙な文書群を読みつづけることになる。その過程で、呉一郎という青年が正木博士の精神操作により、叔母と婚約者のモヨコを殺害したという事件の詳細が明らかになる。しかし読みおえた直後に、死んだはずの正木博士が現れ、「私」は若林の策略によって事態を誤解させられたのだと説明される。

正木博士は「私」にべつの実験を施し、窓の外に広がる「解放治療場」の光景を見せる。そこには「私」とそっくりな呉一郎の姿も見える。正木は1100年前の中国にまでさかのぼる呉家の歴史と、呉青秀という画家が死体の腐敗を記録したという絵巻物の由来を語る。混乱した「私」は街へ飛びだすものの、気がつくると再び教授室に戻っていた。そこで発見した新聞の号外から、「私」は一ヶ月前の出来事を追体験していたのではないかという仮説を立てる。

最後に自室に戻った「私」は、またもや「.....ブウーーンンン.....」という時計の音を聞く。「私」は事件の犠牲者たちの幻影に襲われ、頭を強く打って気を失う。意識が遠のくなかで、最後に眼にしたのは自分によく似た青年、おそらく呉青秀の姿だった。

3.2. 識者の見解

江戸川乱歩は、夢野久作が「狂人^{きちがい}と云うものに大変興味を持たれた」と指摘し、本作をつぎのように評した。

作品で言えば「ドグラマグラ」がそうですが、「あやかしの鼓」もそうですし、「一足お先に」と云うものもあります。私は夢野君のこの狂気を主題とした作品だけは、どうもよく分らないのでありますが、これは或は私の方が狂気というものをよく知らない為かと思いますが、若し言い得可くれば、夢野君の書かれた狂気の世界は、狂人自身が書いた狂気の世界で、文学者が書いた狂気の世界ではないというようなところがある。然しその方が実際に近いかも知れませぬが、そこに小説と現実の違いがなければならないのではないかと思うのですが、併し夢野君は大変この種の作品に力を打込まれ、「ドグラマグラ」の如きは、長い年月かけて完成されたと言って居られましたが、苦心された事はよく分るのであります。(江戸川 2014: 45)

「文学者が書いた狂気の世界」というよりも、「狂人自身が書いた狂気の世界」。これほど『ドグラマグラ』の奇妙さをよく伝える評言は少ないだろう。鶴見俊輔は、夢野のこの狂気的な世界観は、禅僧として活動した時期があることに由来すると推測する。

インドもそうだし、メキシコもそうだし、アメリカインディアンもそうだが、メスカリンとか、ペイヨーテとか、LSDを飲んだ世界なんですよ。どうしてこういうところへくるんだろう。おそらく夢野久作は麻薬を使ってなかったらと思うんです。にもかかわらず感覚がそう

いうところへくるわけですね。やっぱり坊主であって放浪したときの体験じゃないかと思うんですけどね。(鶴見／谷川 2014: 107)

『ドグラ・マグラ』の狂気を感じさせる世界観は、特異な時間感覚によく表現されているように思われる。倉数茂は、つぎのように分析する。

『ドグラマグラ』を読んだときにまず驚かされるのは、この一二五〇枚に達する巨大な長編から、ほとんど時間的運動が感じられないことである。それは、物語内容が短い時間内に限定されているからではない。むしろこの印象は、主人公でもある話者「私」が、ほとんど変化の契機を持ち得ないまま、ひたすら他者の語りの奔流にさらされるという物語上の構造から来るものだ。主人公は最初から出来事の推移を見守る観客であって、物語上で新たな変化や経験と出会うことはない。周囲の登場人物とも、長口説を傾聴する以外の形でかかわることはない。(倉数 2014: 173)

この受動的な時間体験は、ほとんど災厄のようにして「私」に迫ってくる。だからか、鶴見俊輔は核兵器の被曝体験にすらなぞらえる。

夢野久作は、意識の存在のはじめとおわりを書いた作家である。彼の作品は、ひとすじの放物線のように、一つの領域をかこいこみ、そこにてらしだされている今の自分をつつみこむ放物線外の闇を感じさせる。／『ドグラ・マグラ』になると、ひとすじの放物線というよりも、何者かの暴力によってこわれたガラス窓のように、ギザギザにこわれた時間を壁にして、話はすすみ、そしておわる。このこわれた時間は、原爆にうたれた人びとのもつ時間の感覚とあい通じる。(鶴見 2024: 240)

3.3. 『ドグラ・マグラ』に関するインタビュー

ヨシさんが『ドグラ・マグラ』を知ったきっかけは、富樫義博の『レベルE』だった。このマンガでは、主人公が「ドグラ星」、ヒロインが「マグラ星」の出身と設定されており、「夢野九四郎」というキャラクターも登場する。ヨシさんは、小中学校の図書室で『ドグラ・マグラ』を探したものの見つかることができず、高校の図書室でようやく発見したように記憶している。しばしば「通読した人は精神に異常を来す」などと言われる本作だが、ヨシさんはもちろんそのような異常を経験しなかった。そして語る。「読んで発狂したとかはなかったけど、でも15年後か20年後くらいに発達障害で診断受けるって想像できなかったですよ。生まれながらに精神疾患があったというオチですけど」。

ヨシさんはミステリー小説に関心があったので、読むべくして読むことになった作品と認識している。主人公はいわゆる「信頼できない語り手」だ。「私」が呉一郎だという仄めかしは多く

なされているにせよ、実際にそうなのかは最後まで曖昧だ。「アンチミステリー」と形容されるように、夢野は伏線を散りばめつつも、すべてを回収せずに、読者に肩透かしを体験させる。ヨシさんは高校時代にこの作品を通読できたと言うから、筆者は率直に言って、驚いてしまった。筆者はやはり高校生のとき以来、本作に何度か挑戦してきたものの、今回まで読みとおせたことはなかった。今回も、初めて映画版を観ることを思いたち、ようやく物語の大筋を理解できた次第だ。

ヨシさんも「この作品を読みやすいと感じる人がいるかどうかわからない。少なくとも僕は読みづらいと思った」と語る。「チャカポコ、チャカポコ」のお経はもちろん、話し言葉も奇態な印象を与えるし、学術論文や新聞記事が取りこまれていて、コラージュワークのような作品になっている。ヨシさんがジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』を連想する、と口にしたので、筆者はさすがにヨシさんは博学だなと思った。文学研究も海外文化研究も専門としていないのに、ジョイスが取りくんだ縦横無尽の文体実験のことを知悉しているのだ。

さらにヨシさんは、感嘆符を連続させたりするなど、ライトノベルの技法に通じるところもあると指摘する。加えてヨシさんは、これは読者のインパクトを与えるため、とりわけ狂気の印象を高めるためにやっているのだらうと述べ、この文体はヨシさんも苦手だと言う。「乱歩と夢野久作って、似た者同士として並べようとする人もいるけど、文体はぜんぜん違うと思う」。筆者としてもまったく同感だ。

ヨシさんは「巻頭歌」として掲げられた「胎児よ／胎児よ／何故躍る／母親の心がわかって／おそろしいのか」（夢野 1976 上：3）について言及し、作品全体が胎児の見た夢だと考えると腑に落ちる、と指摘する。筆者自身は、ここにドイツの進化論者エルスト・ヘッケルの理念「個体発生は系統発生を繰り返す」が現れていると感じるし、実際にそのように解釈する人も多いようだ。筆者はヘッケルについて論文を書いたこともあるので、今回ようやく本作を読破できたことは感無量だった。

『ドグラ・マグラ』で中国で呉清秀が得た体験は、心理遺伝として脈々と子孫に受けつがれてきたというイメージが提示されている。ヨシさんは、「呉清秀の元ネタは、芥川龍之介の『地獄変』に登場した絵師だと思ってます」と話す。その遺伝を伝える胎児が、巻頭で踊っていると表現されている。ヨシさんは「それは ADHD の脳内世界に似ているかもしれない」と言ったので、筆者は意外な感じを覚えざるを得なかった。もしかすると、発達障害と文学の関係を探っている筆者のためのリップサービスとしての発言だったかもしれない。

いずれにしても、本作の物語は作品名の『ドグラ・マグラ』に対応していて、読者を混乱を誘う。作中にも『ドグラ・マグラ』が登場し、「ドグラ・マグラという言葉は、維新前後までは切支丹伴天連の使う幻魔術のことを言った長崎地方の方言」で、『堂廻目眩』あるいは『戸惑面喰』と当て字できると語られている（夢野 1976 上：93）。ヨシさんはそのことに言及し、死んだと説明された正木博士が登場したり、正木先生が語る「W」と「M」というふたりの青年のイニシャルが鏡文字になっていたり、若林博士の名前も「鏡」太郎だったりするし、正木が登場すると若

林博士が姿を見せなくなったり、全体の物語も堂々巡りするかのようになると指摘する。

ヨシさんは語る。「記憶も輪廻転生が繰り返かえされている。しっちゃかめっちゃかな作品で、わからない。胎児の夢は胡蝶の夢を取ったものでしょうし。「水槽の脳」の思考実験を連想させます。デカルトの「われ思う、ゆえに我あり」の反対。「われ思う、しかし我なし」。じぶんはここにいると思っけていても、発狂したらどうなる？ 発達障害者だって狂っていると言える面があるわけで、考えさせられます。狂気に陥って殺人を犯す、という事件が起こることもあります。人間には時限爆弾的に、精神疾患にかかる要素が備わっている。街中にふつうにいる人が異常を来たして、犯罪に走ってしまうとか。そういう不安定さがむかしから気がかりで、この作品に惹かれたんです」。

作中には「キチガイ」という差別的な表現があふれているが、ヨシさんは「キチガイ地獄外道祭文」は倫理的な意味でも注目に値すると話す。なぜなら、精神病院の閉鎖的な環境が批判されているからだ。「いまほどの、ちゃんとした治療薬もない時代の作品なのなんです。1930年代の作品なのに、先進的。フーコーがもっとあとの時代にやった精神医学批判を連想させる。昨今でも精神科病棟で患者に対する人権侵害が起きてますよね。ですから、『ドグラ・マグラ』は意外と「なるほどな」と思えるんです」。

ヨシさんはフーコーまで知っているんだな、と筆者は改めて感心した。さらにヨシさんは、エドワード・ゴーリーの事例と夢野の事例を重ねあわせ、従軍体験が残酷な表現に影響しているという仮説を話してくれた。「ゴーリーでも夢野久作でも、いろんな人が無意味に悲惨な目に遭うんです。これはそういう不条理な状況を戦場で体験してからではないかなって」。

乱歩が、夢野の作品は作家が狂人を描いたというふうではなく、狂人が作品を書いているような印象だと指摘した記事に言及すると、ヨシさんは「作家としての資質がだいぶ違いますよね。ある意味では、夢野久作のほうが本物。乱歩はポーとかの海外作家のパクリだってバカにしてみましたしね」と話してくれた。実際のところ、夢野は「江戸川乱歩氏に対する私の感想」で、「江戸川乱歩は要するにエドガア、アラン、ポーに対するエドガワ、ランポに過ないのかな」と苦言を呈している（夢野 1992: 23-24）。

4. エドガー・アラン・ポーの『アッシャー家の崩壊』

4.1. 『アッシャー家の崩壊』の梗概

「私」は幼なじみのロデリック・アッシャーから手紙を受けとり、アッシャー家の屋敷を訪問することにする。ロデリックは体調と精神の不調を訴えており、最大かつ唯一の友として「私」にあいたがっていたのだ。

到着した「私」は、沼地に囲まれ古色蒼然として荒廃した屋敷と、その影響を受けたかのように顔面蒼白の男へと激変したロデリックに驚かざるを得なかった。ロデリックはこの屋敷で、双子の妹マデラインと唯一の伴侶のようにして連れそっているのだが、妹は不可解な病に苦しめら

れ、それがアッシャーの焦燥の原因だった。

マデラインの容体は悪化の一途を辿り、やがて彼女は息を引きとってしまう。ロ德里ックの提案で、マデラインの遺体は一時的に屋敷の地下室に埋葬されるが、この直後からロ德里ックの精神錯乱は高まり、屋敷の不気味な雰囲気も高まっていく。

数日後、激しい嵐の夜に事件が起こる。ロ德里ックは異常な興奮状態に陥り、妹を生きたまま埋葬してしまったと叫ぶ。突然、純白の衣装を血まみれにしたマデラインが現れ、ロ德里ックを床に押しおしてしまう。極度の恐怖に襲われたロ德里ックは絶命し、マデラインも兄の亡骸に崩れおちてしまう。

恐怖に駆られた「私」は屋敷から逃げだすが、振りかえると屋敷が崩壊し、海鳴りのような叫び声のなかで、沼地に沈んでいくのを目撃する。こうしてアッシャーの一族は滅亡する。

4.2. 識者の見解

エドガー・アラン・ポーは怪奇小説や推理小説の父祖として知られ、SF小説やゴシック小説の分野でも先駆的意義を認められている。ハワード・フィリップス・ラヴクラフトは、ポー作品の特徴をつぎのように表現している。

詩も小説も宇宙的パニックの重荷を負っている。胸をえぐる不快な嘴をもつ大鴉、有害な尖塔で鉄の鐘を鳴らす食屍鬼、暗い十月の夜のウラルメの地下納骨所、海底の慄然たる尖塔と円蓋、「時間と空間を超越して崇高に存する荒あらしくも異様な土地」——これらのすべてやさらに多くのものが、詩の強烈な悪夢の狂おしい騒乱の只中でわれわれを横目で見るとして散文においては、畏がはっきりと口を開けている。——われわれがほとんど疑いもしない無害な言葉によって、信じられようもない異常さが狡猾にほめかされて、恐ろしい知識めいたものになったあげく、やがて語り手の虚ろな声の緊張が途切れて、いよいよない暗示の恐ろしさが伝わってくる。有害にも眠りこんでいた魔性のパターンや存在が、恐ろしい一瞬の内に目覚めて、身の毛もよだつ事実の開示が突然の狂気を告げたり、記憶に残る激変の響きをたたえて爆発したりする。（ラヴクラフト 2009: 63）

このように狂気を漂わせる作品をつぎつぎと送りだしたポーは、精神的な窮乏に苦しみ、神秘主義的な合一感に憧れ、依存症的な兆候を見せていたことでも知られる。その事情について D. H. ローレンスは、つぎのように描写する。

ポーは、きわみまで高められた精神的愛の恍惚を経験した。そしてその恍惚の境地を欲し、その境地以外はなにも欲しがらなかった。そのとき経験した大いなる充足感、汪溢感、合一感、生命の昂揚感、それを彼は求めていたのである。このような充足感を彼はとにかく経験した。そのような神経の合一による精神的愛の恍惚こそ人生最大の経験で、人生そのもので

あると、彼はことあるごとに言われてきた。そして自らそれを試みたところ、たしかにそれが人生そのものであると知ったのである。そこで彼はそれを欲しがったのだ。そして手に入るはずだと思った。自然のさまざまな限界すべてに逆らって自分の意志を固めたのだ。

ここにみえるのは、自分の信念と自分の経験に基づいて行動しようとする勇敢な男の姿である。しかし、それは、傲慢でもあり、正気の沙汰とも思われない。

ポーは、どんな犠牲を払っても、その恍惚感と昂揚感を得ようとした。そして狂乱状態になった。ちょうど今日の典型的なアメリカ人女性が、同じものを求めて夢中になっているのと同じだ。つまり、生の昂揚と、汪溢と、陶醉である。ポーは、アルコールをはじめ、手あたり次第の薬物に手を染めた。同時に、手あたり次第の人間も試してみた。彼がその壮大な計画を実際に試した相手は彼の妻であった。彼の従妹、歌うような声をした少女である。彼は彼女を相手に、その極みまで高められた充溢感、昂揚感をつかみ、虹色に輝く恍惚感を味わおうとした。それは、調和がもたらす極度の緊張に震える神経の震動であったが、さらに高い調子に高揚していくと、ついに少女の血管が破れ、血が外へ流れ始めた。それが愛であった。それをもし愛と呼ぶとするならばの話だが。

愛はひどく淫らにもなり得るのだ。

(ローレンス 1999: 133-134)

ポーの本名自体を自身の筆名に変えた江戸川乱歩は、ポーの影響の広汎性をラジウムの放射能という比喩で表現している。

彼の作物は、多く短篇であって、しかも一字一句に神経を籠め、リズムを追い、句読の打ち方にさえ、微妙な苦心を払ったという点、所謂珠玉にも例うべきものに相違ない。だが、宝石の様にただ空しく光っていたのではない。それは各方面に放射した所の世にも奇怪な魔力を蔵していた。非常に変てこな云い方だけれど、私は彼の作品を読みながら、時々思うことがある。『これは珠玉ではなくてラジウムだな』と。ラジウムの極微なる一片は宝石よりも尊く、しかも、あらゆるものを浸透して、遠く広くその偉力を放射するのだ。エドガア・ポーとラジウム。奇怪なる比喩であるが私は何故かそんなことを思うのである。(江戸川 2016: 306)

また『アッシャー家の崩壊』を翻訳した巽孝之は、つぎのように本作の魅力を要約している。

人間の精神と屋敷の構造が共感関係を結ぶという、主人公ロデリック・アッシャーの書架にも見える神秘主義者スウェーデンボルグばりの発想だけでも秀逸だが、さらに一種の「美女再生譚」とも解釈できるロデリックの妹マデラインの生き埋めと再生が加わり、しかも「ライジーア」で開発された小説と詩の融合もさらに巧みに行われる。かくして彼は自身の考え

る短編小説の三大条件「効果」「統一」「多様」を最も理想的な水準で実現してしまった。この達成がなければ、現代作家スティーヴン・キング一九七七年の原作小説を映画監督スタンリー・キューブリックが一九八〇年に視覚化した「シャイニング」も、ヴァージニア州に建つ不可思議な旧家を描く新鋭作家マーク・Z・ダニエレブスキーの実験小説『紙葉の家』も、決してありえなかったろう。（ポー 2009: 200）

クロード・ドビュッシーによるオペラ『アッシャー家の崩壊』（1908年～1917年まで制作されたものの、未完）は、原作では曖昧にされていたロデリックとマデラインのあいだの近親相姦的ニュアンスを明確化している（青柳 2009: 242）。同様に本作を近親相姦の物語として解釈する論者は数多くいる。

4.3. 『アッシャー家の崩壊』に関するインタビュー

ヨシさんはまず、原文を読んだわけではないし、江戸川乱歩や夢野久作に比べて、語りうることが少ない、と率直に打ちあけてくれた。怪奇小説に関心があったのでゴシックホラー系作家の元祖として、またミステリー小説も愛好していたので、世界初のミステリー作家という触れこみを知って、ポーには早くから興味を抱いていた。乱歩作品が「変態」、夢野作品が「狂気」というキーワードで総括できるならば、ポー作品は「不穏」と総括できるとヨシさんは考えている。ポーの文体はゾワゾワする感じだとヨシさんは言う。肖像写真を見ても、病んだ印象を放っているのが心に残る。

中学生の頃に、ポーの『モルグ街の殺人』を読み、犯人がオランウータンだという仕掛けに驚いた。荒木飛呂彦のマンガ『ジョジョの奇妙な冒険』でオランウータンの「スタンド使い」が登場するのは、ポーに対するオマージュだったのだと推測した。『黒猫』『黄金虫』『早すぎた埋葬』なども読んで、ポーが密室殺人や暗号解読の魅力に気づき、ミステリー小説というジャンルを築いたことに敬意を抱いた。ポーは1849年に死去したから、日本では黒船が来航する前にあたる。その先駆性は驚くべきだとヨシさんは語る。

ヨシさんは、『アッシャー家の崩壊』で、ロデリックが精神を病んでいるのは、ポー自身の鬱傾向を表現しているのだと読んだ。この時代のアメリカでは死者と生者の交信する物語などが書かれたりしていたことを知って、オカルトやスピリチュアリズムとの親和性の高さがおもしろいと思った。『アッシャー家の崩壊』は登場人物が3人に限定されているところに好感を覚えたという。ヨシさんはたいていの少年マンガを好まないが、それは新規のキャラクターがつぎからつぎに投入され、読者人気を反映して、キャラクターが使い捨てられたり、定着したりするので、物語が稚拙になるところが不満なのだそう。逆に言えば、そうではない少年マンガには惹かれる。『アッシャー家の崩壊』はそのような作品たちに似て、人間関係が凝縮され、3人の内面だけを観察すれば良いところに満足できる。

沼地に囲まれた陰鬱な館には、「虚ろにして生きものの眼とも見まごう窓」（ポー 2009: 157）

があったり、「一本のかすかな裂け目がジグザク状に、建物正面の屋根から下へと壁づたいに走っており、その尖端はといえば陰鬱なる沼のさなかへと飲みこまれている」（ポー 2009: 160）と記述されたりしている。住人の狂気と館が呼応していて、最後に一族の血脈も館も崩壊するという趣向はおもしろいとヨシさんは語る。

主人公が即興の詩を読む、という場面は日本の小説にはあまり見られないもので、むかし読んだときは、「海外の文学ってこういうものか」くらいに思っていたものの、詩と小説を融合させるというジャンル横断的なポーの独自の芸術観の反映と知って、感心した。

ポーは早くに母を亡くして、妻とも死別している。ほかの作品を見ても、あえなく死んでいく薄幸の美女の物語がちらほら見受けられた。死んでいる女性の美しさへのこだわりが独特だと感じるという。そしてヨシさんは、死んだ女性が蘇るという展開は、ホラー小説の流儀では否定的な意味あいを帯びているという問題、本作でもマデラインがロデリックを殺してしまうという事実に言及した。倫理に背くことで悲劇が発生する、とヨシさんは要約する。

ヨシさんは当時は医療が発展していなかったから、誤って仮死状態と判断されることも多く、それで蘇生したように見えたのではないかと示唆したあと、ヨシさんが好む九井諒子の『ダンジョン飯』に話題を移した。この作品では主人公の妹がダンジョン（地下迷宮）でドラゴンに喰われたあと、禁断の黒魔術を使って蘇生させるのに成功するが、妹は怪物化してしまう展開が発生する。このような内容は、ポー以前より存在した定番の物語パターンかもしれないが、魅力的なモチーフだということはまちがいない、とヨシさんは考える。「古くは『古事記』の黄泉比良坂もしかり、死者を蘇生させるという禁忌を犯してしっぺ返しを食らう。してはいけないけどしてしまうという展開は散々やりつくされているけど、それでも人を惹きつける鉄板かと」と話す。

ヨシさんはアッシャー家が最後に崩壊するのはおもしろいが、現代では宮崎駿のアニメ映画『カリオストロの城』『天空の城ラピュタ』などで、建物の崩壊場面がクライマックスに描かれるように、ありきたりの演出になっていることに注意を促す。その上で、建物よりも人間が壊れる怖さに言及する。ヨシさんは、幽霊や怪物などの超自然的存在よりも人間が怖いと感じる。怪談のジャンルでいう人怖系だ。だから、『アッシャー家の崩壊』に影響を受けた映画のうち、『シャイニング』を非常に好んでいる。アルコール依存の父親が閉鎖されたホテルに影響を受けて発狂し、家族を恐怖させる。ポーからの直接的な影響は少なかったとしても、アリ・アスターの『ミッドサマー』も好みの「人怖」作品だ。

ヨシさんが、『アッシャー家の崩壊』の前に『早すぎた埋葬』を読んだほうがおもしろいかもと言ったので、筆者はポーがモチーフを使いまわしすぎることについては、気にならないだろうかと尋ねた。するとヨシさんは答えた。「単純にネタがなかっただけなのかもしれませんが、自閉スペクトラム症的なこだわりかとも思います。村上春樹も「井戸」を使いたがるし、そういう特性なのかもしれません。谷崎潤一郎は「足」、ボルヘスは「迷宮」みたいに、好んで同じモチーフを何度も作品に落としこむことって、結構あることかもしれないけど。ポー自身の人生が幸せ

でなく、アルコールに溺れていたのは、そういう発達障害の生きづらさに関係があるかもしれませんね」。なるほど、ポーをヨシさんとともに筆者とも似たような個性の人だと推測するのは、決して不可能なことではないだろう。

ヨシさんはさらに双子のモチーフについて言及した。「一卵性だと、同じ卵から生まれてきているので、思い入れが強くなる。『少女革命ウテナ』に、顔がよく似ている双子の男女が出てきますよね。あれ、いびつな関係が描かれていておもしろかったです」。筆者が「あのふたりは一緒に入浴する場面があるなど、双子の男女としての一線を超えていますよね」と応じると、ヨシさんはこう応じた。「身を寄せる相手を肉親に求めて、なおさら精神的にいびつになるけど、いびつになるがゆえに、美しさが表現される。僕は中学生の頃から酒を飲んでいたけど、背徳感が美しく感じられたからです。タブーを冒瀆すること。でもじぶんで犯罪になるような「禁断の蜜」を味わおうとは思わないから、創作物で満たしている」。

筆者はさらに書齋の怪しい蔵書が続々と書名を挙げられていく場面に話題を移した。多くの自閉スペクトラム症者と同様に収集癖がある筆者は、このような絢爛たる蔵書の描写に酩酊を誘われる。

わたしたちはそこでおびたがましい本を読み耽った。ジャン・パティスト・ルイ・グレッセの名詩「ヴェール・ヴェール」や「シャルトルーズ」に始まり、ニコロ・マキャヴェリの『大魔王ベルフェゴール』、エマヌエル・スウェーデンボルグの『天国と地獄』、ルードヴィヒ・ホルベアの『ニコラス・クリムの地底旅行』、ロバート・フラッドやジャン・ダンダジネ、それにド・ラ・シャンブルの『手相見』、ルートヴィヒ・ティークの『青い彼方への旅』、それにイオマツ・カンパネラの『太陽の都』に至るまで。とくにふたりが夢中になったのはドミニコ会のエイメリック・ド・ジロンヌによる八ツ折判の『異端審問記録』であった。またポンポニウス・メラの地理概説書のうちには古のアフリカに住む半人半獣の酒神サテリュロスや半ば山羊に似た森の神アイギパーンのすがたを表す記述があり、それを読んでロデリック・アッシャーは何時間も夢みるようなようすだった。もっとも彼が何より欣喜雀躍したのは、四ツ折判でゴシック体のとてつもない稀覯本を熟読するときであった。その本は忘れられた教会の祈禱書であり、『マインツ教会合唱団による死者のための通夜』と題されていた。(ポー 2009: 177-178)

ヨシさんは話す。「僕にも収集癖はあって、マコトさん〔筆者注：筆者の自助グループでの呼称〕の家で人形を見せてもらったときは、僕も集めようかなと思ったくらい。でも満たそうとすると、欲望がドミノ倒しになっていく。じぶんの枷になる。引越しの際に大ダメージになります」。筆者が、文学作品のなかでおもしろそうな品々が列挙される際に、自閉スペクトラム症の特性が刺激される感じはあるだろうかと尋ねると、こう答えた。「ありますね。僕は音楽に詳しくないけど、村上春樹の作品でよく音楽が流れていて、それに対する言及が散りばめるかのように出て

くる。本棚の書名が出てくるのも、そういうおもしろさですよ。実際の本棚にも興味が強くて、マコトさんの家でも歩きまわってずっと見てしまったし、介護の仕事をしたときにも、あんまり良くないと思いつつ、そういう願望を抑えきれずに、お客さんの本棚を見てしまった。そう言えば、韓国に住んでたとき日本人の家に行ったら、よく文鮮明の本が置いてあって、ああ、そういう理由で韓国在住なんだってわかって、おもしろかったですよ！」

5. 総括

ヨシさんは、総じてカルト的な作家を好む。今回のインタビューで扱った三人の作家のほかには、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、フランツ・カフカ、安部公房などを愛好する。答えが出ない迷宮的作品に安心感を覚えるのだそうだ。子どもの頃からパズルを好み、ミステリー小説を好み、映画『キューブ』で展開されたような脱出ゲームを見るのを好んできた。絵画ではルネ・マグリット、サルバドール・ダリ、ジョルジュ・デ・キリコなどのシュールレアリスティックな作風を偏愛する。同じく答えのなさが感じられて、魅力的に感じられるそうだ。マンガの領域では、最愛の作家が『ねじ式』などのつげ義春ということになる。

ヨシさんがホラーな味わいの創作物を愛するのは、じぶんの精神的な歪みに恐怖感があるからだ話す。娯楽としてホラーを摂取することで、精神の均衡を保てると考えている。ヨシさんは語る。「そういう作品でガス抜きをしていない人間は、ナイフを振りまわしたり、廃人になったりするんじゃないでしょうか。スプラッタ映画が好きだと言ったら、発達仲間に「そういうことをしたいの?」とか「闇を感じる」とか言われるんですけど、もちろんそういうことをしたいわけではないです。僕、そういう作品を見たら涙が出てきて、感動するんですよ。最近だと『オオカミの家』とか最高でした。『ウルトラマン』を好きな人は、『ウルトラマン』を見て変身願望を満ちます。僕はホラーを観て、劣等感とか怨恨を発散させていると思う。でも摂取すればするほど、より強烈なもの、より鋭いものが欲しくなるんですよ。ドラッグとかアルコールとかと同じだと思いますけど、もっと強いものを求めるようになる。創作物に触れれば触れるほど目が肥えて、ありきたりなものに満足できなくなったり、より斬新より衝撃的な快感を欲するようになります」。

そのように話すヨシさんに、筆者はポー自身に依存症の傾向があったこと、筆者とヨシさんの共通点がアルコール依存症の当事者だということを念頭において、依存症の自己治療仮説について説明した。かつて依存症者といえば、だらしなくアルコールやドラッグやギャンブルに、あるいは買い物やセックスやゲームに溺れている人というイメージだったが、現在では依存症者は一般にトラウマによって傷ついており、その痛みを癒そうとして依存物質や行動嗜癖にのめりこんでいくと考えられられるようになってきている（カンツィアン / アルバニーズ 2013）。このように説明すると、ヨシさんは答えた。「ホラーにも治療効果があると思います。ガス抜きとしては良い。SNSでもリスカ〔筆者注：リストカットのこと〕する人は、ホラー好きが多くて興味深いなと思って、見てます。怖いものを見て、ハラハラしてほっとする。僕も同じことです」。

このようなヨシさんの語りを筆者はじぶん自身のものであるかのように聞いていた。今回の江戸川乱歩、夢野久作、エドガー・アラン・ポーに関する一連のインタビューは全体に渡って、筆者として異論を感じるどころがほとんどなく、ヨシさんと筆者の考えに大きな断層は確認できなかった。このような仕方ですべて的、あるいは怪奇な創作物に癒されている自閉スペクトラム症は世の中に案外多いのではないかと想像された。

文献

- 青柳いづみこ「音楽になったポー——クロード・ドビュッシーとフランス近代を中心に」、『エドガー・アラン・ポーの世紀——生誕200周年記念必携』、八木敏雄／巽孝之（編）、研究社、2009年、232-249ページ
- 江戸川乱歩「孤島に描く幻想世界——「パノラマ島奇談」〈わが小説-128〉」、『朝日新聞』1962年4月27日（朝刊）、9面
- 江戸川乱歩『怪談入門——乱歩怪異小品集』、東雅夫（編）、平凡社、2016年
- 江戸川乱歩『パノラマ島綺譚——江戸川乱歩ベストセレクション6』、角川書店、2009年（a）
- 江戸川乱歩『孤島の鬼——江戸川乱歩ベストセレクション7』、角川書店、2009年（b）
- 江戸川乱歩「夢野久作氏とその作品」、『別冊文藝 夢野久作——あらたなる夢』、河出書房新社、2014年、37-47ページ
- カンツィアン、エドワード・J・／アルバニーズ、マーク・J『人はなぜ依存症になるのか——自己治療としてのアディクション』、松本俊彦（訳）、星和書店、2013年
- 倉敷茂「言語の見せる夢」、『別冊文藝 夢野久作——あらたなる夢』、河出書房新社、2014年、171-180ページ
- 佐藤重臣「石井輝男論」、『日本カルト映画全集1 江戸川乱歩全集 恐怖奇形人間』、ワイズ出版、1995年、77-81ページ
- 鶴見俊輔『ドグラ・マグラの世界 夢野久作 迷宮の住人』、講談社、2024年
- 鶴見俊輔／谷川健一「多義性の象徴を生み出す原思想」、『別冊文藝 夢野久作——あらたなる夢』、河出書房新社、2014年、80-107ページ
- ポー、エドガー・アラン『黒猫 アッシャー家の崩壊——ポー短編集1（ゴシック編）』、巽孝之（訳）、新潮文庫、2009年
- 夢野久作『ドグラ・マグラ』全2巻、角川書店、1976年
- 夢野久作『夢野久作全集11』、筑摩書房、1992年
- 横道誠「文学作品を読む自閉スペクトラム症者——「脳の多様性」と「当事者批評」」、『パハロス』2号、エスノグラフィックとフィクション研究会（編）、2021年、70-90ページ
- 横道誠「異人同士のナラティブ——発達障害の当事者同士が文学について語りあう」、「ナラティブ・ポリティクスとしての異人論——不寛容時代の〈他者〉をめぐる物語」、山泰幸／西尾哲

夫（編）、臨川書店、2024年、332-356ページ
ラヴクラフト、H. P. 『文学における超自然の恐怖』、大瀧啓裕（訳）、学習研究社、2009年
ローレンス 『アメリカ古典文学研究』、大西直樹（訳）、講談社、1999年

注記

本研究の研究計画は、京都府立大学の倫理委員会で、研究計画書の内容および実施の適否などについて、科学のおよび倫理的な側面が審議され、承認されている。

謝辞

本研究は科研費 JP23K00460 の助成を受けている。

(2024年9月30日受理)

(よこみち まこと 文学部国際交流文化学科)